

巢 立 ち

平 本 輝 男

(京都市消防局長)

一年は、一月一日から始まる。

これとは別に、年度（会計年度）があり、年度は法によって四月一日から始まるとされている。なぜ四月一日からなのかは知らないが、明治時代からそうになっているらしい。

長い冬が終わり、暖かい春がきて、空にはひばりがさえずり、桜の花が満開となる頃は、すべてが胎動を始めようとする、物事を始めるには最もふさわしい季節である。

新しく小学校に入学する子供たちが、入学式の日、盛装した母親につれられて、声までかん高くはしゃいで跳びはねながら学校に向かう姿や、ある子は大声で泣きわめきながら、子犬が紐で引かれるのをいやがって必死にあとずさりするように、母の着物の袖を引っばって、行くのをいやがる姿を見るのも、この頃の風物詩である。

消防学校にも入校式がある。

入校式の会場で緊張している入校生の姿は、小学生とあまりかわらない。きのうまでの、ジーンズにTシャツ、前をはだけたブルゾン、スニーカーといったラフなスタイルから、一転して、紺色の制服を着せられ、およそめたことのないネクタイを不器用にしめて、制帽をかぶった姿は、一応、見た目には消防職員だが、どうもぎこちない。しかも、入校式は、教官や先輩に囲まれた中での式である。伏し目がちな青年もあれば、上を向いたり、教官の列にちらちらと目をやったり、およそ校長の訓示など耳に入っていないようである。

しかし、最近の、型にはめられた窮屈な生活を避けたがる風潮の中で、消防という規律、サービスの厳しい職場に入ろうと志ざした青年には、何か、こういう社会に入り育っていく、独特の、真面目な、ひたむきな雰囲気を感じられるのは、消防人であるわれわれの欲目からだけだろうか。

八カ月の全寮制の初任教育を無事終えて、消防人としての知識、技術を身につけ、若さと自信に満ちた姿で望む卒業式での青年達の姿は、入校式で見かけた青年とはまるで違った、たくましい青年に成長していることに驚かされる。

入校式での、あの未知数ではあるが期待された青年像が、見事に花開いた感じである。なんといっても、目の輝きが違う。あのおどおどした目が、今、光り輝いている。

新しく赴任する職場での不安はあるものの、八カ月の教育の中で、消防人としてやっていける自信と、やらなければならないんだという目的意識を身につけたことの、この青年の人生における価値は非常に大きいと思う。「初心忘るべからず」という言葉は、この時にこそ送りたい。

この青年が、わが消防のために、必ずや、やってくれる、何かをやってくれる闘志を感じるとともに、この青年を立派に育て、はぐくまなければならない責任の重さを痛感するのも、このときである。